

詩編 第56編 10節

「神にあって、私はみことばをほめたたえます。主にあって、私はみことばをほめたたえます。」

これほど繰り返しほめたたえられることばを私は知らない。これまで聞いてきた言葉はその時々のものであり、時が過ぎると言葉は消滅する。言葉を放った者は心変わりし、言葉が陳腐で無責任なものに変形する。聞いた言葉に落胆することは幾多もある。語った者たちが朝露のごとく消える。その人の言葉のいっさいが時の裁きを受け消えてなくなってしまう。語った当人が語る言葉にどれほどの思いを込めていたとしても。あるいはまったく気にもとめずに語ったとしても。

しかし、ここではみことばがほめたたえられている。たたえる私が、神にあって、そして、主にあってと前置きをしてのたたえである。みことばは神がお語りになる。みことばは主がお語りになる。このみことばを聴く私は、神の、主のお語りを聞いている。神の、主のご臨在のなかにいる。

みことばをほめたたえます、とお語りになるみことばそのものと、語られている神を、主をほめたたえている。永遠なる神、主が語られる永遠のみことばを聴く者のところと唇にはほめたたえの言葉が湧き上がる。みことばは永遠に変わらず届いている。

2024年5月18日